

遠慮なければ近憂あり

苦難続く新政権

県肢連名誉理事 大前 繁雄

鳩山政権が発足してこの三月で半年が過ぎた。この半年の歩みをふり返ると、まさに「苦難の行軍」という言葉が、ぴったりとあてはまる。野党の時代は本当に良かった、という鳩山首相の吐露は、おそらく本音であろう。野党時代に、ひたすら政権交代至上主義で安易に公約したことが、いざ与党になってみると、それらが大きな重しになって、うまく行かずに苦悩しているというのが現在の新政権の姿である。

論語の有名な一節に「遠慮なければ近憂あり」という言葉がある。遠い先のことを考慮せずに物事を進めると、必らず近いところで憂うべき事態が起るという意味であるが、今の鳩山政権の姿を云い得て妙である。

普天間基地移設問題

たとえば普天間基地移設問題。鳩山首相は昨年八月の選挙前、しきりに「出来れば国外。最低でも県外に」と大見得を切っていたが、当時は、確たる実現の方策を有していたわけではない。ただ、思い切った甘言を沖縄県民に投げかけ、支持を得ようとしただけである。実際に沖縄では県民の期待を一身に受け小選挙区全区で勝利したのであるが、今、その期待の重圧に押しつぶされかかっているのである。

おそらく、鳩山総理は自分達が最も批判していた前政権の辺野古案を踏襲せざるを得ず、そうなれば政権の崩壊という憂うべき事態も覚悟しなければならない。

財源問題

さらにもう一つの難題は、財政問題である。

選挙前、野党という気楽な立場から、子供手当、高速道路の無料化、ガソリン暫定税の撤廃、農家への戸別補償、高校授業料の無料化等々、総額十六兆円余りのバラマキ政策で、有権者の歓心を買うことにつとめた。そして、その財源としては「無駄の排除と予算の組み替え」による。としていたが、そのいずれも芳しい成果を上げていない。鳴り物入りで始めた事業仕分けも、世間の耳目を引きつけた割には中身は乏しく、七千億円程度の捻出がやっとで、それも、重要な事業を安易に切り捨てているという悪評が巷に溢れている。また一般会計、特別会計のうち二〇〇兆円余りの予算を組み替え、その一割、二〇兆円程度の財源を捻出するという「予算の組み替え」は、ほとんど手つかずである。

結果、新年度予算は大量の赤字国債の発行ということになり、このまま政権が続くと、国債市場の崩壊も起りかねないとささやかれる危機的状態である。

政治とカネ

そして、とどめは政治とカネの問題である。首相の巨額資産税脱税疑惑。幹事長のゼネコンからの不動産取得資金疑惑。小林千代美議員の北海道教組からのヤミ献金。これらはいずれも、その秘書が逮捕されている異常事態にもかかわらず、三者とも「知らなかった」というひと言で、疑惑を免がれようとしているのである。

とくに鳩山首相はかつて、自民党の加藤紘一氏の秘書が逮捕された際、「秘書の罪は本人の罪。私ならただちに責任を取ってやめる」と公言していたにもかかわらず、今回自らがその立場に陥っても一切、責任を取ろうとしないのは、言行不一致のそしりは免れない。

遠慮なければ近憂あり — 政治家は、この言葉をもう一度肝に銘じ、軽々な言動を謹しむべきであろう。

(前衆議院議員)